

都市とそこに生きる人々と



*山田晴利

都市の歴史

建築史家の鈴木博之は近著「都市へ」¹⁾の中で次のように述べ、従来の都市研究の欠点を鋭く指摘している。

——都市の歴史は、しばしば都市を管理する制度や都市計画の跡を追うことによって叙述されてきた。都市の歴史は、都市制度史あるいは都市計画史と同義語のように見なされてきたのである。(中略)都市の歴史を考える際には、土地に蓄積されてきた過去の歴史に注意を払う必要があるであろう(同書 15 ページ)——。

鈴木は、都市に刻まれた歴史を丹念に追い、都市の変貌の姿を明らかにしていく。土地の歴史をひとつひとつほぐしていき、思いもかけない歴史を白日の下にさらすのは、実に爽快といってもいい作業である。ここでは大宮盆栽村の成立経緯について鈴木の所見を簡単に紹介することにしよう。

江戸時代、江戸北郊の駒込、巢鴨、染井は世界でも最大規模の園芸・植木の中心地であった。明治に入ってもこの地域では植木業が栄えたが、関東大震災後に市街化が進み、植木や盆栽の仕事を続けることが困難になったため、盆栽業者たちは大宮に土地を求め移転した。これが現在の盆栽村の起こりである。

これだけでは盆栽業者の集団移転の話にしかないのであるが、鈴木は盆栽村を日本型の田園都市であると位置づける。田園都市は、英国のハワードが提唱した、職住一体の自立的な都市である。わが国では内務省地方局の有志によってハワードの考えがかなり早い時期に伝えられていたが、田園都市の基本的な理念である、職住一体の自立的な都市という部分はきれいに抜け落ちてしまい、田園都市はベッドタウンと化してしまった。

しかし、鈴木は大宮盆栽村に職住を一致させた町づくりの軌跡を認める。盆栽村が成功したのは、

*道路部総合交通安全研究官

盆栽という特殊な産業だったからではないのか、という当然の疑問に対しては、「庭園と緑のモザイク都市であった」江戸以来の都市の伝統の力を指摘している。盆栽村はおそらくは日本でも唯一といっている、言葉の真の意味における「田園都市」なのである。

鈴木は本書の最後で、明治以降「都市は変貌をつづけ、そのなかに建築は建ちつづけ、デザインは変化してきたが、そこに本当の都市の文化が蓄積されたであろうか」と問っている。この反省の上になら、次の世紀の都市を作っていくことがわれわれに課せられた使命である。

人々の生活

従来の都市研究が見落としてきたのは、上に述べたような内在的な都市の変化だけではない。都市に生活する人々についても、実に多くのことが見過ごされてきた。たとえば、われわれは江戸時代の土地利用が身分制にもとづくものであることも、江戸の町割りも知っている。しかし、そこでどのような生活が営まれていたのか、という点になるとはなはだ心許なくなってしまう。義理人情に厚い「熊さん」、「八つつあん」、「横町のご隠居」が暮らしていたのだろうと想像するのがせいぜいのところである。

しかも、荒俣宏²⁾がいみじくも指摘しているように、江戸時代に営まれていた生活はいまでは滅びてしまい、それがどのようなものだったのかを偲ぶことはほとんど不可能である。

少なくともつい最近まではそう思われていた。しかし、江戸時代の日本人の生活をよみがえらせるという、無謀とも思える試みに挑み、それにかなりのところまで成功するという快挙がなしとげられた。渡辺京二による「逝きし世の面影」³⁾がそれである。

渡辺は、幕末から明治にかけてわが国を訪れた外国人が残した、旅行記、日記などを渉猟し(その文献の数たるや膨大である)、いまは失われた

文明の姿を明らかにしていく。

その結果、「妖精の国」と呼ばれ、外国人に「四圍の状況が変わりさえすれば、こんなに美しい国で一生を終わりたい」とまで思わせた、当時のわが国の姿と人々の気質、暮らしぶりがよみがえってくる（「」内は文献3からの引用。以下同じ）。

江戸に通じる田舎道を通った、スイス領事リンダウは、「全てが安寧と平和を呼吸している」ように感じ、「これほどまでに自然のさなかに生きる人間の幸せを感じたことはなかった」と記す。

郊外には「豊饒ですばらしい景観」があり、田園は魅力的で、緑の中に「絵に描いたように美しい」茅葺屋根の家並みが存在する。田園地帯は英国のそれよりも美しい、という評価を下される。

江戸には、巨大な門も大廈高樓も、ましてや天にそびえる塔も存在せず、ヨーロッパの大都市のようなモニュメンタルな壮麗さを欠いているが、田園的な美にはことかかない。よく指摘されているように江戸は「庭園の町」であり、「木立に恵まれた風景の美観と、周辺の絵のような眺めという点では、江戸は西洋諸国のあらゆる都市を凌駕」していた。

人々は生き生きとして、陽気で、土地には「生きることの軽やかさ、人生の嬉戯感」が感じられた。彼らは、外国人に臆することなく話しかけ、好意を示す。そこには言葉の壁など全く存在しないかのようである。

街にひしめく人々は多様であった。通りには、子供、婦人、老女、ありとあらゆる種類の行商人、魚、玩具、菓子等の呼び売人、羅宇屋、靴直し、理髮人、などなどがいた。こうした多様さは、生活の多様さと同義だった、と渡辺は指摘する。「街路は、たんに人が通りすぎるところではなく、授乳から行商人の呼び売りにいたるまで、暮らしがそこで展開され営まれる場所であった。」

そして、当時の文明は「雑多で細分化された生き場所あるいは隠れ家を提供」していた。羽織の紐だけ、硯箱だけ売っている店が存在し、しかもそれで生計が立てられていた。非常に繊細かつ多様な棲み分けが成立しており、細民がつつましく生きうる空間があった。

こうした徳川後期文明は、「ひとつの完成の域に達した文明」だった。しかし、世界の資本主義システムは「その成員の親和と幸福感、あたえられ

た生を無欲に楽しむ気楽さと諦念、自然環境と日月の運行を年中行事として生活化する仕組みにおいて、異邦人を賛嘆へと誘わずにはいない文明」を滅ぼしてしまう。わが国を訪れた外国人の中には、米国総領事ハリスの通訳をつとめたヒュースケンのように、「この進歩はほんとうにおまえのための文明なのか」という感想を抱いた人もいる。日本アルプスの紹介者、ウェストンは「明日の日本が、(中略)今日の日本よりはるかに富んだ、おそらくある点ではよりよい国になるのは確かなことだろう。しかし、昨日の日本がそうであったように、昔のように素朴で絵のように美しい国になることはけっしてあるまい」と述べている。しかし、こうした個人的な感懐は、時代の流れの中ではまったく無力でしかなかった。さらにいえば、古い文明が滅びることなくして、わが国の近代化は不可能であった。

けれども、渡辺は徳川後期の文明が滅びた理由としてこれだけではまだ不足であると感じているようだ。彼は、徳川後期の文明には「個」の自覚が欠けていたことを指摘する。「個」の自覚なしには、「感情と思考と表現を、人間の能力に許される限度まで深め拡大して飛躍させよう」ことが不可能である以上、「古きよき文明は命数を終えねばならなかった」と本書を結んでいる。

おわりに

「逝きし世の面影」³⁾は明治以後のわが国の歩みについて、われわれを深いもの思いに誘う。もとより歴史を繰り返すことはできない。しかし、別のやり方があったのではないか、という悔恨にもいた苦い思いが湧いてくることも事実である。

さらに、われわれは「個」の自覚によってどれほどの発展を遂げることができたのであろうか、と自問することもできる。

次の時代のわが国をどのようにかたち作るかはわれわれに課せられた重い課題である。この課題の解決の一助になればと思い、この一文をしたためた。

参考文献

- 1) 鈴木博之：都市へ、日本の近代10, 中央公論新社, 1999年2月
- 2) 荒俣宏：ブックライフ自由自在, 集英社文庫, 1997年10月
- 3) 渡辺京二：逝きし世の面影, 日本近代素描I, 葦書房, 1998年9月